

所報 研究所だより

(特集)教育・しまんと

令和3年度
NO. 5

発行 四万十市教育研究所

四万十市田野川乙 1240 番地
Tel/Fax (0880) 32-1020
ふれあい学級(0880) 32-1022

★標準学力調査結果について

4月21～23日に実施された「標準学力調査」の分析結果を、7月29日(木)午前

に開催された校長会の場で久米田研究員から説明をさせていただきました。その後、各種研修会及び学校閉庁日さらにそれに準ずる期間等の関係で全体への報告が遅くなりました。

あらためて数値結果と成果・課題について報告させていただきます。

【表中の赤字は全国を上回っているもの】

【国語：学年別平均正答率】

	小3	小4	小5	中1	中2
全 国	72.1	69.3	67.8	71.4	68.5
四万十市	72.6	69.3	72.6	76.1	71.3

【算数・数学科：学年別平均正答率】

	小3	小4	小5	中1	中2
全 国	75.5	70.9	65.3	68.2	58.6
四万十市	78.1	75.4	67.6	69.7	61.2

【英語：学年別平均正答率】

	中2	中3
全 国	54.5	62.9
四万十市	54.7	62.3

【中1社会・理科：学年別平均正答率】

	社会	理科
全 国	54.3	57.2
四万十市	52.9	58.8

【成果と課題】

◆国語科においては、**小4を除く全ての学年で全国値を上回っています。小4も全国値と同じで小中共に望ましい状況にあります。**

強みとしては小中共に「書くこと」が継続しています。課題としては、これも小・中共に「読むこと」があげられます。

★二学期以降の改善策として考えられること

は、小学校の物語文では、題名や挿絵等も手掛かりにしながら、「誰が」「どうして」「どうなったか」等を把握することを繰り返して内容を理解させること。

また説明文では、表紙や題名からどんな話が展開されるのかを予想させ、内容を捉えることにつなげていくような授業を構成していくことが必要だと考えます。

中学校では、説明文では言葉に着目し、事実と感想、意見等の関係を押さえること。文学作品では、場面と場面、場面と描写を結びつけ、登場人物の心情をつかませていくこと。さらに、互いの意見や感想を共有させ、自分の考えを広げる等の授業を構成していくことが求められます。

◆算数・数学科では、**すべての学年で全国値を上回り、安定した学力が備わっており伸びが見られました。**

領域別では、小学校は全体として「データの活用」に強みが見られ、**特に小3・小4は全ての領域で全国を上回っていました。**今回の結果で、あえて課題をあげるとすれば、小5の「図形」(全国：70.7、本市70.6)でした。

◆中学校では、中1が小学校と同様に「データの活用」に強みが見られ、**中2は全ての領域で全国平均以上でした。昨年の結果の課題を踏まえ、中学校での取り組みの成果がうかがえます。**

課題を上げるとすれば、小5と同様に中1の「図形」(全国：69.7、本市69.2)があげられます。

★二学期以降の改善策として考えられることは、小学校では「図形」については角の大きさを根拠に、的確に判断できるよう授業

の中で十分思考させ、測定の経験を豊かにする工夫、図形を授業の中で書く作業に終わらず、図を用いたり、算数用語を使ったりしながら説明させることが必要である。また、既習の学習を含め、数量の関係について着目し、色々な計算の仕方・工夫をすることを日常生活に生かしながら授業を仕組むことを意識すること。

いずれにしても、めあてを明確にし、能力ベースの授業を展開していくことを、学校全体で共有し実践していくことが求められます。

中学校では、問題を数学化する経験を積むことで、「何を」「どのように解決したらいいのか」見通しを持つ力をつけていくことが必要である。また、日々の授業で必然性をもたせるように意識させること。

例えば、線分図・面積図等を使って、全体量や部分量、式の意味の読み取りを強化したり「関数」では表・式・グラフで考察し、どのような関数になっているのか判断したりする場面を意図的に設定することが求められます。

◆英語科を領域別にみると、中2・中3共に「書くこと」に強みが見られ、3文以上の英作文の問題では、昨年と同様に正答率が高く、特に中2では+20ポイント以上の正答率でした。

課題としては、中2が「読むこと」(全14問中12問が全国値より低)、中3が「聞くこと」(全9問中6問が全国値より低)があげられます。

★二学期以降の改善策として考えられることは、「読むこと」では、長文を読む機会を増やし、代名詞が何を指しているのか、読

み取った内容を踏まえて英文を完成させる活動を意図的に仕組んでいくこと。

「聞くこと」では、「必要な情報・概要・要点」から目的をもった聞き方をさせていくこと。

生徒が英語を使う学習場面を多く設定し、語彙や文法知識の定着を図ることが求められます。

◆中1の社会科及び理科を5段階の評定で見た場合、**社会科では評定1～2の人数が42.7%、評定4～5の人数が33.3%。**

理科では、評定1～2の人数が40.6%、評定4～5の人数が42.7%と、二極化の傾向が顕著に表れており、しかもこの傾向は継続しています。小学校高学年における学習内容の定着に目を向ける必要があるように思います。

類似した傾向は、**小学校の3段階評定では、小3の国語科(評定1:35.7%、評定3:47.7%)・算数科(評定1:27.6%、評定3:45.6%)にも見て取れます。**小学校低学年時の学力の定着度にも目を向ける必要があるように思います。

※詳細については、7月29日の校長会の資料をご覧ください。今後の授業改善及び12月実施予定の「県版学力調査」や、来年度の「全国学力・学習状況調査」等に生かしていただきたいと思います。